

第121回 静岡大成中学校 静岡大成高等学校 開校記念式典 学校長挨拶

本日、静岡大成中学校・静岡大成高等学校、第121回開校記念式典を挙げていただけますことを大変嬉しく思います。ご来賓の皆様には、ご多用の中ご臨席を賜り、衷心より厚く御礼申し上げます。

静岡大成中学校・静岡大成高等学校は、今年で121年を迎えました。人間であれば、自分の生きてきた人生を振り返り、思い出や出来事などを自分自身で懐かしむことができますが、学校での思い出や出来事は、その時に学校に通っていた生徒や教職員、あるいは保護者や学校に関係する人たちが、それぞれに振り返ることになります。これら一人ひとりの記憶が学校の歴史を創っているのではないのでしょうか。

ある卒業生の記憶の一つをご紹介します。学校がなくなってしまった、1945年6月の静岡大空襲の時のことです。校舎は全て焼けてしまい、生徒が学校生活を送る場所がなくなっていました。先生たちは、学校を続けようと仮の校舎を探し、床が抜け落ちるようなひどい環境の中で、学校生活を再開しました。しかし、教科書もノートも文房具もなく、学校の再開とはとても言えない状況でした。衛生状態も悪く、ノミやシラミが服や髪の毛を這っていたといえます。

当時の生徒たちは、この苦しい状況の中、じっと我慢して学校生活を送っていましたが、学校の再建を、学校や先生任せにはしてはいませんでした。自分たちが行動して稼いだ収入を、学校再建の費用に充てようと考えたのです。そして、手芸品を作って販売したり、アルバイトに出掛けたりしました。自分たちで考え、話し合っただけで行動に移した、まさに「自律」「対話」「行動」でした。

話しを現在に戻しましょう。今日本は、これまで誰も経験したことのない、急激な人口減少が進み、2040年には、働き手の中心となる現役世代が、現在から2割減少する一方、65歳以上の高齢者の割合は、30%を超えると予想されています。労働力は減少し、みなさんの世代を中心とした現役世代が、お年寄りを支えていくことになります。このような状況の中で、生徒のみなさんが、この問題にどう向き合うべきかを考えることは、極めて重要です。なぜなら、この問題を解決していけるのは、当事者であるみなさんだと私は思うからです。「誰かに任せればいい」という考えでは、今の日本の社会と変わらず、問題は解決しません。より良い社会にするためには、自分たちが考えて、行動に移さなければならないと私は思います。

今みなさんにできることは「自律」「対話」「行動」を実践し、より良い学校を創るためにどうしたら良いかを、考え行動することだと私は思います。みなさんの考えと決断と行動が、この学校の新しい歴史を創っていくことになります。それが、より良い社会を創ることにつながっていくはずで、みなさんの今後の活躍に期待します。

令和6年5月24日
静岡大成中学校・高等学校
校長 山田 隆司